飢餓対策ニュース　第 312 号　発行日 2016 年 6 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヵ国 60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころとからだの飢餓」に応える活動をしています。

★Tポイントを利用して「南スーダン・マブイ小学校給食支援」ができます。現在までに185500ポイント（円）のご協力（1929件）がありました。募金はTポイント募金で検索

2016夏 ハンガーゼロ・ファシリテーター トレーニング（愛知県名古屋市内）

「いつか海外で働きたい」「なぜ貧しい国があるの」、「興味はあるけど、開発途上国で活動、となるとちょっと心配…」という方にもおすすめです。
飢餓や貧困、国内外で多発する災害対策について講義とグループワークで学ぶことができます。ぜひご参加ください!
お問い合わせ、お申込みは下記まで

【日時】 2016 年8月8日㊊～13日㊏
※部分参加希望は、ご相談下さい。
【会場】 グレイスハウス上前津
〒460-0012 名古屋市中区千代田218
地図 https://goo.gl/maps/us7yT3qU1Nq
【費用】 30,000 円
【締切】 7 月31日㊐
【定員】 12 名（定員になり次第、締め切り）
★お問合わせは愛知Tel:052-265-7101まで

ハンガーゼロ 活動支援コーヒー

アイスでもホットでも
ゼリーにしても
「おいしい!」と評判の
コーヒーがお得です

モカブレンド レギュラーコーヒー（粉 200 g）1 袋 930 円 ＋送料 600 円＝ 1,530 円を 1,300 円でお届け（北海道・沖縄・離島は別途 ）。さらに 5 袋で 4,000 円、10 袋で 7,000 円と大変お得になります。
（税 ·送料込の価格 / 1ヵ所へのお届けです）
※一袋につき給食 5 食分の支援になります。
（アフリカ・ケニアの教育施設）
2016年地球家族カレンダーで先着100 名様にお送りした割引チケットをご利用いただけますので、お持ちの方は番号をお知らせください。
【問合せ】キングダムビジネス
〒540-0026　大阪市中央区内本町1-4-12NPO ビル402
TEL :06-6755-4877　FAX :06-6755-4888
メール : customer@kbwin-win.org
Web : キングダムビジネスで検索。

熊本地震緊急支援のご協力ありがとうございました

当機構は4月中旬の熊本地震発生直後から緊急支援活動を続けておりましたが、この6月末をもちまして現地にスタッフを派遣しての支援活動と募金の受付は一旦終了いたしました。
今後は、地元の救援組織「九州キリスト災害支援センター」（本部福岡）を通じての支援とさせていただきます。なお、チャリティイベント等での応援についてのご相談は個別に対応させていただきます。
募金報告:12,753,066円（5月末現在）
皆さまのご協力感謝いたします。

6月下旬に森親善大使の慰問コンサートが行われました

ハンガーゼロ サポーターを大募集中!!

現在までに 4140口

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ JIFHサポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 500 円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女
〒
フリガナ
住所：
（電話）
▼申込日：　　年　月　日▼NL 312 号

FAX・072-920-2155

■発 行 者　岩橋竜介
■発 行 所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
Webサイトアドレス　http://www.jifh.org/
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　https://www.facebook.com/hungerzero
ハンガーゼロで検索！
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
●郵便振替　00170–9–68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ
今すぐ募金ができます！　かざして募金
大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1　TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCC ビル 517 号室　TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
東　北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6エマオ2階 E　TEL (022)217-4611　FAX (022)217-6651
愛　知　〒460-0012 名古屋市中区千代田 2-19-16 千代田ビル3F　TEL (052)265-7101　FAX (052)265-7132
広　島　〒730-0036 広島市中区袋町4-8 CLC ブックス 2F　TEL (082)546-9036　FAX (082)546-9037
沖　縄　〒900-0033 那覇市久米2-25-8 メゾン久米 202号　TEL (098)943-9215　FAX (098)943-9216
ＵＳＡ　Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa 8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605　TEL(510)568-4939　FAX(510)293-0940
毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業の協力をして下さっています。
「かざして募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル（株）経由となります。詳しくはウエブサイトをご覧ください。

1 分間に17 人（内12 人が子ども）
1 日に2 万5,000 人
1 年間では約1,000 万人が
飢えのために生命を失っています。

一般財団法人 日本国際飢餓対策機構
2016 7 No.312

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる

地震で被災されました皆様にお見舞い申し上げます

ルワンダピース国際学校
チャイルド・サポーターを通じて支援している「ルワンダピース国際学校」をスタッフが訪問。頁4・5面に記事を掲載しています。

もう一つの「パナマ」も深刻

日本国際飢餓対策機構　広報主任　鶴浦弘敏

食品スーパーの特売コーナーでバナナが100円で売られていることがあります。私たちにとって「バナナは安い」が当たり前の感覚になっている中で、海の向こうではバナナを滅ぼしかねない病気が深刻になっています。専門家によると「パナマ病」は強い毒性をもつカビの一種が原因で、この菌は根から感染して木そのものを殺す「萎凋（いちょう）」を引き起こすとのことです。カビに汚染された土地（畑）は、以後何年もバナナを栽培できなくなるともいわれています。

「パナマ病」はバナナを扱う人々にとって最大の仇敵の再登場です。私たちが食するバナナは「キャベンディッシュ」という品種ですが、1900年代の中頃までは、もっとクリーミーで美味しいとされた「グロス・ミシェル」が全世界で消費されていました。それを絶滅させたのが「パナマ病」です。その対策として病に耐性がある「キャベンディッシュ」が見つけ出されて、現在のスタンダード品種となりました。ところが再登場した「パナマ病」は、このキャベンディシュにも感染する「新パナマ病」だということです。大規模生産者の都合で、一品種のバナナを大量生産する方式の弊害を指摘する声も出ています。それによって安価に生産されるバナナの消費先が私たち豊かな国々に向けられていることも見過ごせない現実です。

フィリピンでは干ばつとこの病気による減産も加わって、バナナの値段が上がり始めています。日本が輸入するバナナは、開発途上国に君臨する多国籍企業の管理下で働く土地をもたない「雇われ農民」や、貧しい小規模農民の手で作られています。もし、この病の影響がさらに広がるとバナナ産業が立ち行かなくなり、それは農民たちの働き場だけでなく、彼らの身近で大切な栄養源が失われることにもなります。人々の健康維持に欠かせないバナナの病が、産地で暮らす貧困層をさらに脅かそうとしています。日本ではフィリピンに住む人々の安い労働力で安価なバナナが手に入りますが、それもいつまで続くのかわかりません。

いま世界を揺るがしているパナマ文書の出現は、世界の経済界に潜んでいた富裕層の姿を暴露して、格差社会の現実を映し出しました。そして、もう一つの「パナマ」が、格差社会で貧困と闘う人々の弱い立場を私たちに教えようとしています。この先「最近バナナが高くない?」の一言で終わらせないようにしたいものです。

【世界里親会報告】　フィリピン・ビコール地域

フィリピン・ルソン島の南東に位置するビコール地域で、子どもたちへの教育支援を行っている、FHフィリピンはスラ地区にあるバービン小学校で、健康プログラムを実施しました。

衛生教育の専門家ブライアン（後列男性）とクリスティーン（前列６人目）

小学生256名への健康プログラム

正しい衛生知識を身につけることは、子どもたちのこれからの人生にとても役立つだけではなく、次の世代にそれを引き継ぐ上でも大切です。そこでFHフィリピンはスラ地区のバービン小学校の協力を得て、3月に256名の小学生に健康プログラムを実施しました。

この健康プログラムのもう一つの目的は、前回行った時から子どもと家族がどれだけ清潔に注意を払うようになったか、その改善度を知ることでした。このプログラムを実施するにあたっての様々な準備は、スラ地区を担当するクリスティーンがこの地区の必要に合わせて計画しました。バービン小学校と緊密に連絡しあい、教師たちがプログラムの流れを作って、それをもとにFHスタッフが解説用の図や表を用意したり、衛生キットを買ったりしました。

2016年3月17日の午前10時から、FHスタッフが、衛生教育の専門家、校長先生、教師たちと一緒に各クラスを回って指導を始めました。４年生から６年生には手洗いの方法や歯の磨き方、しらみの取り方を教えました。この学年の生徒たちは既に手洗いや歯磨きは知っていました。そこで「髪の毛にしらみがいる人?」とたずねると、子どもたちは恥ずかしがることもなく全員が手を挙げました。生徒たちはしらみはしっかり駆除しなければならないことも知っていました。幸いしらみの駆除に必要な酢は各家庭にありますので、家庭でも実行することが出来ます。

ビコール地域では50人の子どもたちがサポーターさんとの出会いを待っています。

サポーターのお申し込みは、JIFH公式ホームページから。「ハンガーゼロ」で検索

学校とのよい関係の中で

レッスンを受けた256名の生徒たちにタオル、歯ブラシ、歯磨き粉、絆創膏（ばんそうこう）、しらみよけシャンプー、くし、石鹸などの衛生キットを配布しました。以前日本から贈られた手洗い設備は、手洗いにとても役に立っていました。この日の活動は予定どおり終えることができ、FHのチームは最初から最後まで学校が協力して助けてくださったことに、心からの感謝を述べました。同様に学校側からも、FHが全生徒と地域のために常に力を尽くしてくれていることへの感謝がありました。

FHは、私たちの身体は神様からの贈り物なので大切にしなければならないということ、また正しい衛生知識は健康で幸せな生活を送る上で必要であるというメッセージが、子どもたちや地域の人たちに根付いていくよう心から願っています。

【世界里親会報告】　カンボジア・チャンヒア村

バ・リアさん（15歳）は中学２年生の女の子です。FHカンボジア子どもクラブのリーダーで、貯蓄グループのリーダーでもあります。彼女には父（50歳）、母（48歳）、兄（17歳）、そして小学5年生の妹（11歳）がいます。

バ・リアさんは貯蓄グループ㊧と子どもクラブの両方でリーダーを担当

バ・リアさん（中2）と家族の生活の変化

母親のバン・ランさんは「私たちの生活は以前は非常に困難なものでした。家にはお金がなく、いつも誰かが病気になっていて何の希望もありませんでした。小学６年生だった長男に、学校をやめて家族を支えるために働くよう頼んだこともありました。いつも自分自身や毎日の生活に落胆していました」と話します。

FHの活動に参加して変化を実感すること

「今は私たちの村を良くするためにFHカンボジアがしてくれている全ての活動に参加しています。夫は村開発委員会の委員をしていますし、私も健康ボランティアをしています。長男も中高生クラブのメンバーで、バ・リアも貯蓄グループと子どもクラブの両方でリーダーをしています。彼女は村の子どもたちや中高生たちの投票によってリーダーに選ばれたので、母親として嬉しいです」

子どもクラブの集会

バ・リアさん

「子どもクラブに参加してから学校の勉強以外のことも学べるようになりました。例えば衛生の知識、物事を肯定的に考えて行動すること、貯金の大切さなどです。この事を通して、勇気を持って夢に向かって進むことや周りの人と良い関係を築くことができるようになりました。一生懸命勉強して高校を卒業したいです。そして将来は立派な教師になりたいです」

バン・ランさん（母）

「FHが私たちの村に来てから、自分たちは大切な存在なのだということを知ることができましたし、子どもの教育の大切さも知ることができました。子どもたちも貯蓄グループに参加して自分たちが学校に行けるように私たち親を助けてくれています。最近私は、収入を得るために家畜を飼い始めました。夫も丸太や薪を見つけて売る仕事を一生懸命しています。家族全員の協力で生活が良くなりました。また食事の前の手洗いや、きれいな水を飲むことを学んだおかげで家族が病気にならなくなりました」

これから期待すること

バ・リア「私たちだけでなく、村のみんなの生活が良くなればいいなと思います。村に暴力が無くなり、お互いに赦し合い助け合うようになったら嬉しいです。特に若い人たちが教育を受けて大学を卒業して、良い仕事に就けるようになって欲しいです」

家畜の世話

村人の手本、バ・リアの家族

スタッフの声

バ・リアさんの家族は村人の良い模範になっています。村人たちの「あの家族が好きだ」、「尊敬している」という声を聞くと、この村の変化を共に喜ぶことができてとても嬉しいです。この活動を支えてくださっているチャイルド・サポーターの皆様に心から感謝します。

JIFHがチャイルドサポーターを通して支援を続けている、ルワンダのピース国際学校を6月に国際渉外部の浅野陽子が訪問しました。

平和に貢献できる人を育てる

ルワンダ・ピース国際学校のビジョン

学校の敷地内にある農園

虐殺被害者のために建てた家

学校のスタッフ

子どもたちが平和に暮らせる世界の実現のため、世界中の子どもたちが来て学べる場となることを願って設立されたピース国際学校は、ルワンダ人でありながら1959年の革命の影響で難民としてコンゴで育ったデニス・ムガボ牧師が始められた学校です。

デニス氏は「1994年の大虐殺の約3ヵ月後にルワンダに戻ると、すべての家に銃弾の跡があり、すべての家が壊されていた。虐殺後の混乱の中でどこを見てもストリートチルドレンだらけだった。」と当時の様子を語ります。デニス氏は、そんなストリートチルドレン3人を世話し始め、やがて首都キガリで、識字教育と壁画などのアートを教えるFine Arts for Street Children という学校を始めました。それがピース国際学校の前身です。2002年にはコンゴやブルンジからの難民の子どもたちを受け入れ、本格的な学校をスタートしました。

朝の給食

政府の開発計画のために今はニャンザの地に学校を移しているピース国際学校ですが、幼稚園から小学校6年生まで、3歳から13歳の子どもたち約300人が学んでいます。遠くから歩いて通ってくる子どもたちや家では十分に食べることができない子どもたちが沢山いますので、1年生までは10時になるとミレットやメイズ、ソルガムなど5種の穀物でできたお粥とパンの給食があります。午後からも勉強を続ける中高学年の子どもの中で、家が遠かったり家庭が貧しいかったりする子どもにはお昼に給食が出されます。

英語教育の狙い

世界中の人たちと手を取り合って平和を実現する人財の育成を目指しているこの学校では、英語を母語とするウガンダ人の教師を雇用して英語教育に力を入れています。校舎の眼下には平和に貢献した人たちの絵を施した宿泊施設があり、近隣諸国からの難民に一時的な宿泊場所として提供し、難民キャンプに入れるよう手助けをしています。またそのような新しいお友だちが増えた時には、一体何が起きたのかを学び、平和について考える機会としています。

デニス氏は、敷地内を案内しながら、「Fine Arts for Street Children」当時の生徒たちは今では成人して家庭を築いている。この絵は彼らがお礼にと描いてくれたものなんだ。」と嬉しそうに教室や宿泊施設に描かれている壁画を見せてくれました。

初等教育を修了した地域の子どもたちが引き続き質の高い教育を受け、平和に寄与する人財となっていくことを願うこの学校では、中学・高校の開校を計画してきました。資金不足で中断している校舎の建設を一日も早く再開し、2020年には地域の人たちのために大学も開校したいと、デニス氏の夢は膨らみます。

地域の人々に敷地を解放

共に平和な社会を実現していこうと、学校では地域の人たちとの関係を大切にしています。図書館や水汲み場を地域の方々に開放する一方、校庭が手狭なこの学校がスポーツ大会を行う時には、地域の広場を使わせてもらいます。

ルワンダの主要な産業は農業ですが、起伏の激しい土地柄から農民の大半は小さな土地しか持っていません。そのためになかなか生産量が上がらず、苦しい生活を送っている家庭が少なくありません。そんな中で子どもを育て、農業をし、子どもを学校に通わせようと頑張っている女性たち。彼女たちの収入や貯蓄が向上すればきっとコミュニティの暮らしはよくなる、とデニス氏の妻ダティバさんは、自宅を開放してパッチワークやカゴ作りを教えています。

虐殺被害家族への支援

デニス氏は、虐殺で家族を殺され自らも病気で職に就くことが難しいという男性のために、地域の人たちと協力して家を建てました。校舎や学校寮の建設の時などは、そういう困難を抱えている地域の人たちを労働力として積極的に雇用しています。また学校所有の土地の一部をコミュニティ農園として提供、特に苦しい生活をしている女性10人、男性2人の12人のグループが農園を耕作・管理しています。収穫した穀物はピース国際学校が給食の食材として買い取り、グループの人々の生活を支えています。グループの人たちは交代でこの農園の世話をし、当番でない日は別の仕事をして収入向上に努めることができます。コミュニティ農園の収入の半分はみんなで分配し半分はグループとして貯蓄しています。

人々との絆を深めて

昨年9月21日の「世界平和デー」には、ピース国際学校の職員、教師、生徒たちが平和のための行進をしました。ルワンダで初めてのこの「世界平和デー」の行進が始まると、その意義を聞いた地域の人たちが次々と行進に加わりました。今年は地域コミュニティや地方政府とも連携して、虐殺被害者のためにそれぞれが持てるものを持ち寄る、平和に貢献した人たちを表彰するなど、お互いに助け合おうというコミュニティの絆を深めるイベントにしようと企画中です。

子どもが勉強に集中できるように毎朝５種の穀物でできたお粥とパンを提供しています。㊨デニス氏と試食する浅野スタッフ

学校施設は丘陵地の地形を取り込んで設置しています

連載〈6〉

ラテンアメリカの人々とともに

変わるものと変わらないもの

去る2016年4月、ボリビアで世界里親会を通して支援していた13歳の里子・ダビッド君が病気で亡くなるという悲しい出来事がありました。

彼の村はアンデスの標高約3,300mの高地アサワニ地域にあり、古くからの迷信や土着信仰、男尊女卑（マチズモ）などが根強く残っている地域です。彼は今年1月ごろから頭痛がして食欲が落ちてきていましたが、新学期が始まった2月はまだ元気にサッカーをしていました。しかし3月に入ると腹痛を訴え、発熱もするようになったのでしばらく学校を休むことになりました。

田舎、特に僻地に住む多くの人々は、未だに薬草以外の薬や医者を信用していません。そして彼の両親も例外ではなく、アンデスの土着信仰や迷信・言い伝えを信じていて、症状が悪化し食欲が無くなり両脚も腫れあがってきた息子を医者に連れて行かずに呪術師に解決を求めたのです。

息子が悪霊に取り憑かれた！

FHボリビアの地域担当スタッフは幾度も彼の家を訪問してダビッド君を励まし、祈り、両親に彼を医者に診せるように、又せめて薬だけでも処方してもらって飲ませるようにと強く勧めました。しかし両親は説得に耳を傾けず断固として拒否したのです。

そして「息子はこの1月に牛の放牧に行った際、ある洞窟で一夜を過ごした。その時に悪霊にとりつかれて病気にかかったのだ。あんな場所で眠ったからだ。薬や医者など何の役にたつものか！」と言い、あくまで悪霊が原因だと考えて呪術師を呼んで祈祷してもらう方法を選んだのです。

ダビッド君はどんなに痛く、苦しかった事か！助かったかもしれない尊いいのち。本当に心が痛みます。元気にまた大好きなサッカーを楽しむ彼の姿を見たかった…。彼は村にある小さなキリスト教会へ通うクリスチャンでした。今は痛みもなく神様のみもとで安らかに憩っていると私は信じています。

ボリビア多民族国
駐在　小西小百合

現地スタッフや世界里親会の働きを通して神様が働きかけてくださり、地域の方々の霊・こころの目が開かれ、価値観が変革され、ボリビアでまた世界でこのような悲しい出来事が繰り返されないように、子どもたちが一切の悪しきものから守られて健やかに育っていくことができるように、心から祈らずにはおられません。

「…もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎさったからである。」（聖書）

ダビッド君　天国で安らかに

熱戦の様子、男女混合チームで参加するところもあります

2008年から「チャリティー フットサルカップ」の開催でハンガーゼロの応援をしてくださっている代表の李泰誠さん（31）。普段は大阪の千林商店街で立ち飲屋「いどや」を切り盛りしておられます。4月に開催された第9回カップを通して、ケニアと南スーダンの給食支援のために26万円を超える募金を寄せてくださいました。「開催準備が大変です」と言う李さんですが、それでも応援を続けてくださる思いを伺いました。

私から始めます
支援者の取り組み

チャリティ・フットサルカップ

「子どもが食べられる」にこだわって

お店は京阪電鉄・千林駅を出てすぐ

Q この催しはどのように生まれたのですか

A 最初は東大阪市の鍼灸整骨院のスタッフとして、患者さんと医院スタッフの交流の機会にとフットサル大会を院長に許可していただいて開催しました。2008年にやるならチャリティーで、というアイデアが生まれ支援先を考えていた時に、隣接している八尾市にJIFHというNGOがあるのを知って事務所を訪ねました。

JIFHの事務所で世界の飢餓問題を聞き、世界でこんなに沢山の方々が食べることができないという現実に驚きました。特に乳幼児や成長期に十分に食べられないという子どもたちを何とか助けたいと思いました。

勤めていた整骨院の院長があるとき「一度支援の現場に行ってみたら」とアフリカ行きを勧めてくださったので、数ヵ月仕事を休まずに働いて有休をためて行きました。ルワンダで佐々木和之さん（元JIFH駐在員）のところでお世話になり、フットサルでも応援した現場（REACHサッカー場建設）を見ました。また佐々木さんが携わっている平和構築プログラムの一つ「償いの家」の建設に参加したり、また家庭訪問にも連れて行っていただきました。

ルワンダでの体験が今も

Q その後、整骨院を退職され、ご自身の生活環境が変わった後も応援を続けてくださったのは

A アフリカを訪れ、貧困の中で生きる子どもの現実を見せていただいたことが、現在も応援を続ける思いにつながっています。

Q これまで累計で約190万円を支援して頂いていますが、支援先として子どもの食に関わるものを希望されているのは

A アフリカで貧困や飢餓の現実を見たこと、そして今は仕事で飲食に関わるようになったからでしょうか。また自分が二人の子をもつ親となったことも大きいです。

毎回の募金で果たしてどこまで必要に応えることができるのか、と疑問をもつこともありますが、子どもの毎日の食につながるなら小さな支援でも役立てることができるのではと思っています。

手伝ってくれる方を求む

Q 開催するにあたって苦労されていることは

A 年に1回ですが、仕事も休めないので開催準備をする数ヵ月は、時間と人手の足りなさでしんどくなります。「もう今回でやめよう」と思うこともありますが、自分がやめたら即終わりなので、思い直して少しずつ準備していきます。お店に来るお客さんが入り口のフットサルの案内を見てつり銭を募金してくださる時は嬉しいです。できたら、準備や当日の運営を助けてくれる人がいたらありがたいです。そしたら、僕がもっと参加チームを集めたり、企業に応援のお願いに回れますから。

軽食や飲み物の収益も募金に充当します

李さんのお店で寄せられた募金

チャリティフットサルカップの参加や運営のお手伝いに関心のある方は大阪事務所広報までお知らせください。